

平成22年6月8日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19592472
 研究課題名（和文）エビデンスに基づいた感染管理システムの構築と職員の感染予防行動に関する研究
 研究課題名（英文）Research on Construction of an Infection Management System Based on Evidence and Staff Infection Prevention Behavior
 研究代表者
 佐藤 淑子（SATO YOSHIKO）
 大阪府立大学・看護学部・准教授
 研究者番号：40249090

研究成果の概要（和文）：200字程度、専門用語は避けるか説明をつける

感染予防行動に関する病院職員の意識変革には、自らの感染予防行動について技術的に評価したり、その効果を視覚的に確認できる方法を用いることと、感染対策チームメンバーと病棟スタッフが感染対策に関する共通の目標を持って協同することが必要であると考えられた。また、感染管理システムにおいては、感染対策チームやリンクナース会などの組織を設けるだけでは不十分であり、感染対策チームのメンバーが専門性を発揮できるよう権限の明確化と役割・活動内容の周知徹底が必要であり、さらに院内で最も多くの職員を有する看護職員を感染対策の人的資源として有効活用することが必要であると考えられた。

研究成果の概要（英文）：

In a shift in consciousness for hospital staff regarding infection prevention behavior, it is necessary to make technological evaluations concerning one's own infection prevention behavior and use a method in which visual confirmation of its effectiveness is possible. In addition, it is important for infection control team members and ward staff to cooperate with a common goal regarding infection management.

In the infection management system, merely establishing organizations, such as infection control teams and link nurse groups, are insufficient; it is important to clarify the authority of members of the infection control team to demonstrate their expertise and to thoroughly disseminate role and activity information. Furthermore, it is important to effectively utilize nursing staff as infection management human resources.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：医師薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：院内感染対策、感染管理システム、感染対策チーム、感染予防行動

1. 研究開始当初の背景

これまでの研究結果より、院内感染対策を推進できない理由の一つとして、看護師を含む職員全体の感染予防行動に対する意識不足が認められた。したがって、感染予防行動を実践する職員全体の意識改革がなされなければ院内感染を防止することは難しく、職員の感染予防行動に関連した意識改革を促す効果的な方法について検討することが重要であると考えられた。

その他の推進できない理由として、米国と日本の医療システムの違いによるガイドライン導入の困難さがあり、単に海外の医療システムに基づいた感染対策を導入するのではなく、日本の病院環境や医療システムにあった経済的で効率的な感染管理システムの構築が急務であると考えられた。

2. 研究の目的

研究協力者が勤務する病院において試験的に実施している全職員対象の手洗い・手指衛生の実技演習をふまえ、正しい感染防護具の取り扱いやバリアプリコーションズ、尿道留置カテーテル挿入などに関連する感染予防行動についても実技演習を取り入れ、職員の感染予防行動にどのような変化が生じるか、その効果について実態を明らかにする。さらに、職員全体の感染予防に関連した認識について調査し、意識改革を促す効果的な方法を模索する。

また、国内の医療施設における感染管理システムについて現状の問題点を浮き彫りにするとともに、院内感染防止マニュアルの内容の有効性・妥当性について検討し、日本の医療システムにあった経済的で効率的な感染管理システムとガイドラインのモデルを作成する。さらに、それを試験的に導入して臨床での活用の可能について考究する。

3. 研究の方法

1) 職員の感染予防行動に関連した意識変革を促す効果的な方法の検討について

研究協力2施設（大学病院と僻地中核病院）の感染対策チームと協力し、感染予防行動の啓発活動の一つである全職員への手指衛生の実技演習を試験的に導入し、その効果について検討した。僻地中核病院においては、感染対策チームの立ち上げや啓発活動に協

力し、その活動内容を管理的立場から取り上げ、そこに勤務する職員（医師・看護師・薬剤師・看護補佐など）の感染予防行動と意識の変化について分析・検討した。

また大学病院では、呼吸器感染予防における口腔衛生技術向上のため、神経難病病棟で歯科衛生士による歯科的専門口腔ケアを試験的に導入し、その効果について検討した。僻地中核病院では職員講習会実施後に手型寒天培地によって手洗い効果を細菌学的に確認し、手指衛生の重要性を意識づける試みを行った。

2) 経済的で効率的な感染管理システムの構築と具体的で詳細なガイドラインの作成について

国内100床以上の病院の中から無作為抽出した450施設に対して、感染管理システムの実態に関する質問紙郵送による調査を実施した。265施設から回答があり、その内ヒアリング調査の承諾が得られた104施設から、地域性および施設規模（病床数）、感染対策チームの有無、感染管理担当看護師の専任・兼任の別などを考慮して、21施設をヒアリング対象として選定した。これらの施設において感染管理に携わっている看護師に対し、施設の感染管理の現状、管理システム上の問題や改良点などについて、半構造化面接を実施した。

4. 研究成果

1) 職員の感染予防行動に関連した意識変革を促す効果的な方法の検討について

職員教育にビデオ撮影と編集を導入したことで、自己の手指衛生の技術を視覚的に確認することができるようになったり、手洗い効果を手型寒天培地によって細菌学的に確認する取り組みを行ったことで、手指衛生の技術と遵守の向上につながった。その他、感染対策チームが病棟スタッフと協働して患者ニーズを取り入れた感染対策を実施することにより、多剤耐性緑膿菌の陰性化に成功した。また、歯科衛生士による歯科的専門口腔ケアを通常の口腔ケアに加えることにより、患者の口腔衛生が保たれることが明らかとなった。

感染予防行動に関連した意識変革を促すには、全職員が自らの感染予防行動について技術的に評価できたり、その効果を視覚的に確

認できる方法を用いることと、感染対策チームのメンバーと病棟スタッフが共通の目標を持ち、互いの役割を認識して協同していくことが必要であると考えられた。

2) 経済的で効率的な感染管理システムの構築と具体的で詳細なガイドラインの作成について

感染管理チームとリンクナース会を有する10施設に焦点を当てて、院内ラウンドやサーベイランスなどの感染管理活動について組織活動の視点から分析した結果、これらの施設では感染管理認定看護師や看護部の感染管理担当者が、感染管理チームの活動や他職種との協働において中心的役割を担っている現状が明らかになった。また、感染症治療においては医師間の連携が少なく他の医師への指導が困難な状況にあり、感染管理の組織活動において医師の連携や専門性を発した活動が困難な現状が明らかになった。我が国の現状にあった感染管理システムを構築するには、感染対策チームやリンクナース会などの組織を設けるだけでは不十分であり、ICTメンバーが専門性を発揮できるよう権限の明確化と役割・活動内容の周知徹底が必要であり、さらには院内で最も多くの職員を有する看護職員を感染対策の人的資源として有効活用することが必要であると考えられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

①平尾百合子、野澤かほる、吉原千恵、石原廣子、深堀信子、菊一好子、多剤耐性菌緑膿菌(MDRP)保菌者の感染予防の取り組み—パーキンソン病患者の看護を通して—、日本感染看護学会誌、査読有、VOL.6、No.1、2010.pp36-42

②石原弘子、平尾百合子、佐藤みさを、齋野佳子、山本泰三、シンポジウム「感染看護における多職種との連携」、日本感染看護学会誌、査読無、VOL.6、No.1、2010.pp14-42

③佐藤淑子、林滋子、看護師の感染予防行為を導く認識の形成に向けて—手洗いと防護具の着用に関する調査から—、日本感染看護学会誌、査読有、VOL.5、No.1、2008.pp27-35

④上田博美、平尾百合子、シンポジウム「感

染予防実践のための教育とその効果」日本感染看護学会誌、査読無、VOL.5、No.1、2008.pp8-15

[学会発表] (計7件)

①佐藤淑子、感染対策チームとリンクナース会を有する病院における感染管理の組織活動の現状と課題、日本医療マネジメント学会大阪支部第3回学術集会、2010年1月16日、大阪

②平尾百合子、シンポジウム1「感染看護における多職種との連携」、第9回日本感染看護学会学術集会、2009年1月24日、大阪

③遠藤弓子、マキシマムバリアプリコーションセットの導入による無菌操作行為の検討、第9回日本感染看護学会学術集会、2009年1月24日、大阪

④小川幸雄、北里大学東病院におけるICT活動の現状—職員の手指衛生管理強化への取組—、第18回日本医療薬理学会年会、2008年9月20日・21日、札幌

⑤佐野裕子、僻地中核病院における院内感染対策委員会の活動について、第8回日本感染看護学会学術集会、2008年1月26日、東京

⑥城戸口親史、針刺し事故に関する看護師の認識について、第8回日本感染看護学会学術集会、2008年1月26日、東京

⑦野澤かほる、チーム医療の連携によるMDRP(多剤耐性緑膿菌)陰性化への取り組み、第38回日本看護学会(看護総合)、2007年7月6日、沖縄

[図書] (計1件)

①香春知永、南江堂、看護学テキスト NICE 基礎看護技術 看護過程のなかで技術を理解する、2009年、総ページ数493(86-98)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等：なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 淑子 (SATO YOSHIKO)
大阪府立大学・看護学部・准教授
研究者番号：40249090

(2) 研究分担者

- ① 平尾百合子 (HIRAO YURIKO)
武蔵野大学・看護学部・准教授
研究者番号：50300421
- ② 城戸口親史 (KIDOGUCHI CHIKASHI)
山梨県立大学・看護学部・講師
研究者番号：2031706
- ③ 脇坂浩 (WAKISAKA HIROSHI)
北里大学・看護学部・講師
研究者番号：80365189

(3) 連携研究者

該当なし